

関西社会福祉学会 日本社会福祉学会関西地域ブロック
「第 59 回若手研究者・院生情報交換会」報告書

長岡若葉（大阪公立大学現代システム科学研究科 博士後期課程 2 年）

2025 年 10 月 18 日（土）13：30～17：00、関西社会福祉学会第 59 回若手研究者・院生情報交換会が、I-site なんば（大阪公立大学）にて開催された。本会のテーマは、「なぜ共同研究が必要か？つながることで拓ける研究について考える」である。すでに共同研究を行っているベテラン・若手研究者、他分野とのコラボレーションを行う若手研究者等の報告をもとにグループディスカッションの時間も設定され、共同研究を行ううえで必要となることなどをそれぞれ考える機会となった。

第一部では、まず A～E の各グループに分かれ、自己紹介や本会への参加目的、意気込みなどを共有するアイスブレイクが行われた。続いて、伊藤嘉余子教授（大阪公立大学）より、「なぜ『共同研究』が必要か？つながることで拓ける研究について考える」という題目で本会の趣旨説明が行われた。

第二部では、第一報告者の本田優子氏（大阪公立大学講師）より、「複数の視点・立場の交錯から共同研究について考える」と題した報告がなされた。異なる専門性を持つ人々との共同研究・共同プロジェクトにおいて、異なる視点に触れ、それを互いに尊重することの重要性が強調された。また、本田氏自身が現場実践者として研究を行っていた時期と、研究者として現場実践に関する研究を行っていた時期を振り返り、研究視点の変化についても言及された。特に、実践者から研究者へと立場が移行する、アイデンティティがリミナルな時期の研究活動は、リゾーム的な知の交差に遭遇しやすい時期なのではないかとのことだった。

続いて、第二報告者の西森啓介氏（大阪公立大学博士後期課程 1 年）より、『『福祉』×『心理』+『現場』×『研究』=『社会的養護を担う一因になりたい私』』と題した報告が行われた。西森氏は、心理と福祉という領域横断的な視点から研究を進めており、施設職員であり大学院生でもある自身の立場を踏まえた報告がなされた。大学院入学前より施設職員の立場として共同研究に参加していた経験を持ち、はじめは施設職員同士の研究会だったものが、そこに学識経験者が加わることで共同研究に発展し、その成果を学会発表する毎にさらに研究仲間が増えていったという経験が語られた。

最後に、第三報告者の李瀟瑩氏（大阪公立大学博士後期課程 3 年）より、トランスファラブルスキルを反映できる学振申請書作成と、外国人としての強みの活用に関して報告がなされた。李氏は、自身が学振申請書を記載した際の工夫点として、インパクトのある図表を用いたことや、学際的研究をする価値と現場実践明示したことなどの具体的な方法について紹介した。また、国際比較研究を進める際には各国の制度・施策に優劣をつけるのではなく、それぞれの国の文化的背景を踏まえたうえで日本の状況に再文脈化して検討す

る姿勢が重要であるとの見解が示された。

シンポジストによる報告終了後は質疑応答が行われ、それらを踏まえたうえで気になる点や疑問点等を共有し合うグループディスカッションの時間が設定された。最終的にグループで出た内容をもとにさらなる質疑応答へと展開していった。

各グループから「学会後に挨拶をするにしてもそこからどのように研究者としての繋がりに発展させていくのか」、「他分野の共同研究者をどのように選定したらよいのか」等の具体的手続きに関する質問や、「近年分野横断的、学際的研究が求められるがそもそも社会福祉学自体が学際的側面を有するのではないか」といった社会福祉学そのものを問う質問などが提示された。

このように初歩的、具体的質問がしやすいのは若手中心かつ少人数である本会の強みである。他の会では気後れしてしまうような初歩的な疑問も安心して共有できる雰囲気があり、より具体的かつ実践的な知見の交換が可能となった。また、若手からベテラン、個人研究者や現場実践者等の幅広い参加者の意見を聞くことができ、非常に有意義な機会となった。さらに、中堅・ベテラン研究者にとっても、本会は自身の研究スタンスを見つめ直す機会となったのではないだろうか。若手研究者や大学院生が現在直面している課題や、活用している支援の実態に触れることで、世代間の理解が深まり、今後の研究支援や共同研究の在り方を再考する貴重な機会となったと考えられる。